

## 肛門内科（おしりの相談）

おしりまた特に肛門の病気でお悩みのかたや、陰部ということで恥ずかしくて我慢して受診を控えている方が大勢いらっしゃると思います。きっと痔だろうから市販の薬を塗ればいいだろう、かゆみがあるから薬を飲めばいいとか対応されるかたもいれば、血の付いた便がでてきた、便器が赤くなった、紙に血が付いたとか、肛門が痛くて排便できない、なにかしこりがある、また飛び出していて痛くて座れない、下着が汚れる、肛門がかゆくていけない、肛門も周りがただれる、ひりひりして熱がでてきたといった症状でびっくりして受診されるかたも大勢いらっしゃると思います。このようなお悩みのかたは一般内科医の対応が難しく外科、肛門外科に受診されることが多いのが現状です。もっと気軽におしりの相談ができる診療科があればということで、当院は肛門内科（おしりの相談）という標榜をさせていただいて思います。

どんな病気があるかということではなくて、どのような症状にどんな病気がひそんでいるか、またどういう治療が実際されているかを中心に説明したいと思います。

### (1) 肛門になにかとびだしている（脱肛）

**いぼ痔**が多いです。排便のいきみで肛門の奥の血管を含む粘膜が腫れて外に飛び出したものです。痛みを伴う場合は早く戻してあげないと血豆になりさらに悪化します。治療は便通よくして、排便時にいきまないことです。腫れが強いときは肛門から軟膏を注入（約2-4週）して、内服（ヘモナーゼ+乙字湯）も併用します。症状に応じて期間延長します。ただし、血豆が大きくて痛みが強い場合は、血豆を切開して排除する緊急処置が必要なこともあります。排便するたびや、しゃがむだけで、また歩いているときも飛び出してしまう場合で自然にもとに戻らない場合は、手術の適応がでてきます。特に長年にわたり脱肛が続く場合は、薬では治ることが困難ですので早めからの便通改善、軟膏内服治療が必要です。

次に受診で多いのが**見張りいぼ**と呼ばれるものです。肛門に小さいけど、突起みたいなものが触れるということで受診されます。これは肛門管に切れ痔（便で傷がつく→小さな潰瘍）があるというお知らせです。また切れ痔のさらに奥にポリープができてそれが飛び出すこともあります。見張りいぼ自体はすでに完成されたもので、薬ではなおりませんが、切れ痔がひどくなければ放っておいても問題ないことが多いです。

**直腸の粘膜脱**という脱肛もまれに見られます。高齢者の方や、出産時に会陰切開されたかた、痔の手術後に多くみられ、肛門括約筋のゆるみから生じます。飛び出た粘膜から便汁が漏れ出て肛門周囲がただれる場合や下着が汚れるかたは、手術が必要な場合もあります。ただ、すこしの粘膜脱であれば、便通改善させて、排便のいきみをすくなくすることで切らずに対応できる場合が多いです。

**直腸ポリープ**も偶然発見されることもあります。直腸のなかの、きのこみみたいな形のポリープが便と一緒に飛び出ます。大きくなるとがんになることもあり、直腸鏡または大腸カメラでの検査が必要となります。

## (2) 肛門が痛い、便に血が付く、排便しづらい

いわゆる**切れ痔**の典型的な症状です。硬い便をかなりいきんで排出させたり、ひどい下痢したことが原因で肛門管に傷ができたものです。初期は、排便時の激しい痛みと鮮血が特徴で、痛くて排便するのが怖くなり、便秘が悪化して悪循環になるかたもいます。初期の段階で肛門管に軟膏塗布また内服治療してさらに緩下剤で便通改善しないと、傷が潰瘍となり長引くと肛門管が狭くなって便がいつも細い、肛門が痙攣するようで排便できないという事態になることもまれにあります。この場合には手術（肛門括約筋切開、潰瘍切除、肛門形成等）が必要となってきます。いきみで**いぼ痔も併発**して結局 切れ痔といぼ痔の同時切除ということも実際多く行われます。

切れ痔またいぼ痔以外に、**肛門管がん**がまれにみつかることがあります。出血が長く続くときや、排便の悪化の場合は注意が必要です。

## (3) 肛門の近くが腫れて痛い、下着が汚れる

おしりが腫れていた、膿みたいなのが下着につくと行って受診されるかたは、**肛門周囲膿瘍**（のちのあな痔）をまず疑います。便秘や下痢を繰り返したり、まれに炎症性腸疾患を持病に持つ方に発症します。直腸と肛門管の境界の部分から細菌が周囲に侵入しておしりの皮下まで感染して膿がたまり赤く腫れて耐え難い痛みが生じます。治療は、即座に膿を出す処置が必要となります（病院に入院のうえ脊椎麻酔下で排膿手術となることもあります）。また抗生物質の内服治療も開始します。ただ炎症が収まるには1週間程度かかります。細菌が移動した結果 最終的に臀部と肛門にトンネルができ（これをあな痔です）、便汁が通ることで感染を繰り返して下着が汚れます。根治するには手術が必要となります。まれにあな痔にがんが併発することもありますので注意は必要です。

次に多いのが全身のどこにでも発症する**感染性粉瘤**というおできです。臀部もよく見かけます。急にできるものでなくしこりは以前からあったもので、偶然感染して発症します。局所麻酔で、皮下切開して膿をだしてまた抗生剤で治療します。

## (4) 肛門がかゆい

**肛門掻痒症**といいます。かゆみで夜中に肛門を掻きむしるようなかたもいらっしゃいます。原因は、肝臓病や糖尿病などの全身性の病気が原因のかたもいますが、やはりいぼ痔や切れ痔また穴痔などで、便汁が肛門皮膚にしみてかぶれでかゆみがでることがあります。こぼれた便汁や浸出液で肛門皮膚が刺激されることが原因です。ステロイド軟膏とじめじめが強い場合は、ワセリンや亜鉛華軟膏が有効です。

ほかに皮膚病も注意です。下着などの接触性皮膚炎、アトピーや、白癬菌やカンジダ皮膚炎もかゆみの原因となります。

## (5) 肛門のまわりがただれている、なにかできものがある、ぴりぴりするなどの症状

皮膚炎が生じていることが多いです。原因としてまず

**梅毒（扁平コンジローマ）、トリコモナス、淋菌**の細菌感染症に注意が必要です（抗生剤の内服治療で対応できます）。**カンジダ、白癬菌**による真菌感染症も高齢者に頻繁にみられます（抗真菌剤）。

ウイルス感染症としては、**ヘルペス（単純や帯状疱疹）**感染するとピリピリした発疹が出現してきます（抗ウイルス剤）。またぶつぶつして鶏冠みたいなできもの（尖圭コンジローマ）やBowen病が見つかりこともあります。

注意が必要なものは、**Paget病、悪性黒色腫、基底細胞がん**といった腫瘍性のものです。この場合は皮膚科での精査治療が必要となります。